

巻 頭 言

顧問(部長)教授 川手昭平

探検部は1958年(昭和33年)11月創設以来、今年で35年を迎えた。その間の現役学生、OB諸兄、及び多くの顧問教授の緊密な連携とひたむきな努力の成果として、私学の雄としての関西大学の名に恥じないクラブに成長する事が出来た。

踏査は探検部発足3年目に、部の活動状況の部外への発表のメディアとして発刊されて以来、着実に号を重ねて、1984年第10号が送り出された。以後諸般の事情から9年の空白を余儀なくされたが、OB諸兄と現役諸君の強い要望と協力の結果、ここに第11号を世に問う事が出来るのは誠に喜ばしい限りである。

去る7月末、教育後援会主催の富山・福井地方の父母懇談会に出席した。席上大西学長先生の挨拶の中で引用されたヒマラヤ登山の話に感銘を覚え、先生に御無理をお願いしてその原文のコピーを送って頂いた。

“ヒマラヤ登山のリーダーシップ”と題するこの小論文は、冒頭「ヒマラヤで人間の性格は豹変する」とある。日頃とりつくろい、かくしてきた人間の性格の弱点が、酸素欠乏の高所で露呈される。謙遜、寡黙の人間が、突然興奮してわめき出す。鷹揚の者が頑迷独断に、深慮の

者が利己的に、親切思いやりある者が節介やかに、批判能力すぐれた知的な者が決断力を喪失するにいたる。

二、三千メートルは人間が快適に生活できる高さ、五千メートルは人間が常住できる上限、六千メートル以上は登山家の世界である。八千メートル級の高山はいわば死の世界であって、体力の消耗を最小限に止め、かつ下山の余力を残して登頂を果たすためには、機敏な進退の判断力を必要とする。判断力は直感力に由来し、直感力は体力や知力、意志力とは別の感情力とも言うべき人間の属性の中に求められる理解力である。六千メートル以上の高山では体力、知力の減退とともに、直感のもととなる感情の力も減殺されて行くが、生来豊かな感情を持つ者はその障害を受け難い。

リーダーは高所において遠くから隊員の体の動きを観察して彼らの性格を見分ける必要がある。その挙動は、①日頃と動きの変わらない者、②動きが過剰な者、③鈍い者、の三種類に大別される。②は困難に直面して感情的になる自己顕示型、③は他人を利用し裏切るナルシストないし利己主義者、①は運動が自然で、精神機能も自然であり、信頼できる人間である。

最後に筆者はそのヒマラヤ体験から次のように結んでいる。人類の為になる人間は5%、75%は可もなし不可もなしの平凡人間、20%はマイナスの人間で、困難に直面した人間集団ではこの20%の人が75%の凡人の足を引っ張る。本当にリーダーたりうる人間は5%で、これが75%を救いうると。

六千メートルを超える特殊環境でなくても、人間は何らかの極限状態におかれたときにその本性を表す。平生豊かな感情で自らを包み、人に接し、事を処することが出来る人間こそが一朝有事の際にその真価を発揮しうるであろう。そして筆者の言う感情力は生得的な部分が大きいとしても、日常茶飯の生活の中で明るく、朗らかに、誠をもって生きることによって感情力はより強く培われ、より美しく磨き上げられ

るのではなからうか。常に心して、事に当たって迅速・明晰・的確な判断と行動の出来る人間の5%の仲間に入りたいものである。

部員の全てがこのようなリーダーシップのとれる人間に育つならば、部の発展はいよいよ輝かしいものにあるであろうし、社会に出ても常に光明を点じて人を導く存在となることであろう。探検部は、明年アラスカユーコン川に遠征隊を送り出そうとしている。このようにして育った隊員諸君が、また一つの金字塔を打ち立ててくれることを心から念じている。

ちなみに、前記論文の筆者、原 真氏は外科病院の院長で、北大山岳部を皮切りに計8回の海外登山を果たし、低圧訓練による高所順応、速攻登山を研究、高山研究所長を兼務されているとのことである。

